

『一百四十五箇条問答』と円頓戒について

市川定敬

はじめに

『和語灯録』に収録される『一百四十五箇条問答』は、その質問内容が教義に関するものよりも日常生活における具体的な行為に関するものが多いという点の特徴とするものである。その質問者については、『和語灯録日講私記』が「此の箇條の問は堂上方の女房達より問ひまいらすると見へたり」としているように、公家の女性たちであると考えられている。⁽¹⁾ところが質問内容については、同じ『和語灯録日講私記』が「此百四十五箇條の内尋の詞難心得⁽²⁾品數條あり」としているように、その意図あるいは背景が不明なものが多数ある。⁽³⁾例えば第五三問答では、「還俗の者に目を見合わせずと申しそうろうはまことにそうろうか」という問いがなされており、『和語灯録日講私記』にはこの問答に対する言及はなんらなされていない。そこで『梵網經』の第四十三輕戒を見るならば、戒を毀犯した者に対して「一切衆生、眼に見ることを欲せざらん」と説かれている。かくして、この第五三問答は、『梵網經』の第四十三輕戒の解釈に関する質問であると考えられるのである。

ところで、『四十八卷伝』第二十四卷は

元久二年正月二十一日、尋常なる尼女房達、数多上人の御坊へ参りて、「戒をも受け奉り、念仏往生の様をも承らむ」と申しければ、上人まず戒を授けられ、その後、浄土の法門を述べ給うに：①

と、法然が一定の身分の女性たちに対して戒を授け、かつ浄土の教えを説いていることを伝えているが、こうした機会に公家の女性たちが戒の解釈について法然に問うていたことは十分に考えられることである。こうした観点から『一百四十五箇条問答』を見ていくならば、その問答の背景に円頓戒があると考えられるものが一定数あることを指摘できる。本稿では以下に円頓戒のそれぞれの条目と『一百四十五箇条問答』の關係する問答について取り上げていく。

第一重戒「殺戒」(戒の名称は智顗の『菩薩戒經義疏』による。以下同じ)

佛言。佛子。若自殺教_レ人殺方便讚_ニ歎殺_一見_レ作隨喜。乃至呪殺。殺因殺縁殺法殺業。乃至一切有命者不_レ得_ニ故殺_一。是菩薩應_下起_ニ常住慈悲心孝順心_一。方便救護_上一切衆生。而自恣心快意殺生者。是菩薩波羅夷罪⑤

第一重戒は殺生を戒めるものである。これは円頓戒を挙げずとも、八斎戒・十戒などに戒められるところであるが、この円頓戒における「故に殺すことを得ざれ」という点を問題とし「こころざさぬ魚」を問うものが次の第九四問答であると考えられる。

一つ、我がこころざさぬ魚は殺生にてはそうらわぬか。

答う、それは殺生ならず⑥。

第八重戒「慳惜加毀戒」

若佛子。自慳教_二人慳_一。慳因慳緣慳法慳業。而菩薩見_二一切貧窮人來乞_一者。隨_二前人所須_一一切給與。而菩薩以_二惡心瞋心_一。乃至不_レ施_二一錢一針一草_一。有_二求_レ法者_一。不_二爲說_一一句一偈一微塵許法_一。而反更罵辱者。是菩薩波羅夷罪^⑦。

第八重戒は、物品を乞う者、法を求めるものに対して物惜しみをして与えずに罵ることを戒めているが、これに關わると考えられるものが、第一四一問答である。

一つ、これは御文にて尋ね申す。家の内の者の親しき疎きを嫌わず往生のためと思ひて食物着物給はんは、仏に供養せんと同じ事にてさうろうか。

答う、親しき疎きを簡ばず往生のためと思召して物給ひおわしさん、めでたき功德にてさうろう。御使いによくよく申しさうらいぬ。^⑧

第一輕戒「不敬師友戒」

佛言。若佛子。欲_レ受_二國王位_一時。受_二轉輪王位_一時。百官受_レ位時。應_二先受_二菩薩戒_一。一切鬼神救_二護王身百官之身_一。諸佛歡喜。既得_レ戒已。生_二孝順心恭敬心_一。見_二上座和上阿闍梨大同學同見同行_一者。應_二起承迎禮拜問訊_一。而菩薩反生_二憍心慢心癡心_一。不_二起承迎禮拜_一。一一不_二如_レ法供養_一。以_二自實_レ身國城男女七寶百物_一而供_二給之_一。若

不爾者。犯_二輕垢罪_一^⑨

第一輕戒は、上座の僧や師、同学に敬意を持つて供養することを説き、おごり高ぶる心を戒めるものである。特に「阿闍梨」は弟子を教える師を意味し、第六問答に関わると考えられる。

一つ、一文の師をも疎かに申しそうらえば習いたるものの冥加なしと申しそうろうは、まことにてそうろうか。

答う、師の事は疎かならずそうろう。恩の中に深き事これに過ぎそうらわす。^⑩

また、法然の応答にある「末の世には」という点に関しては他の典拠が推測されるところではあるが、次の第一四二問答の問いの背景も同様の範疇と思われる。

一つ、破戒の僧、愚痴の僧、供養せんも功德にてそうろうか。

答う、破戒の僧、愚痴の僧を末の世には仏のごとく貴むべきにてそうろうなり。^⑪

第二輕戒「飲酒戒」

若佛子。故飲_レ酒而生_二酒過失_一無量。若自身手過_二酒器_一與_レ人飲_レ酒者。五百世無_レ手。何況自飲。不_レ得_下教_二一切人_一飲。及一切衆生飲_レ酒。況自飲_レ酒。若故自飲教_二人_一飲者。犯_二輕垢罪_一^⑫

第二輕戒は、言うまでもなく飲酒を戒めるものであり、また在家信者の五戒、八齋戒、沙弥・沙弥尼の十戒に共通するものではあるが、円頓戒にもその条目があるので指摘しておく。第五七問答が関連する。

一つ、酒飲むは罪にてそうろうか。

答う、まことには飲むべくもなければ、この世の習。^⑭

第三輕戒「食肉戒」

若佛子。故食_レ肉一切肉不_レ得_レ食。斷_二大慈悲性種子_一。一切衆生見而捨去。是故一切菩薩不_レ得_レ食_二一切衆生肉_一。食_レ肉得_二無量罪_一。若故食者。犯_二輕垢罪_一。^⑮

第三輕戒は、肉食を戒めるものであり、これもこの円頓戒の他の背景を十分に考えられるものであるが、肉食に關わるものとして第五八問答を指摘しておく。

一つ、魚鳥穴は、変りそうろうか。

答う、ただ同じ事。^⑯

第四輕戒「食五辛戒」

若佛子。不_レ得_レ食_二五辛_一。大蒜草葱慈葱蘭葱興渠。是五種一切食中不_レ得_レ食。若故食者。犯_二輕垢罪_一。^⑰

第四輕戒は、ネギ・ラッキョウ・ニラ・ニンニク・ハジカミの五辛を食べてはならないと戒めるものであるが、次の第一四問答は、先の食肉戒とこの戒に關連するものである。

一つ、韭、葱、蒜、穴を喰いて香失せそうらわずとも、常に念仏は申しそうろうべきやらん。答う、念仏は何にも障らぬ事にてそうろう。^⑱

第七輕戒「懈怠不聽法戒」

若佛子。一切處有_レ講_ニ毘尼經律_一。大宅舍中講法處。是新學菩薩應_下持_ニ經律卷_ニ至_ニ法師所_ニ聽受_上諸問_一。若山林樹下僧地房中。一切說法處悉至聽受。若不_ニ至_レ彼聽受_ニ者_一。犯_ニ輕垢罪_一⁽¹⁹⁾。
第七輕戒は積極的に説法の場所に向向かなければならないことを説くが、第四八問答と第九一問答がこれに関係すると考えられる。

一つ、聽聞、物詣は必ずしそろうべきか。

答う、せずとも。なかなか悪くそろう。静かにただ御念仏そうえ。⁽²⁰⁾

一つ、聽聞は功德得そろうか。

答う、功德得そろう。⁽²¹⁾

第十二輕戒「販売戒」

若佛子。故販_ニ賣良人奴婢六畜_一。市_ニ易棺材板木盛_レ死之具_一。尚不自作況教_ニ人作_一。若故作者。犯_ニ輕垢罪_一⁽²²⁾。

第十二輕戒は、人身・家畜・棺やその材料の販売を戒めるものである。当時、制度としての奴婢の売買は認められていたであろうが、大乘菩薩の行動規範としての円頓戒はその売買を禁止する。次の第一〇九問答は、世俗の制度と戒の優先順位を問うものとも考えることもできる。

一つ、人を売りそうろうも罪にてそうろうか。

答う、それも罪にてそうろう。⁽²³⁾

第十七輕戒「恃勢乞求戒」

若佛子。自爲_二飲食錢物利養名譽_一故。親_二近國王王子大臣百官_一。恃作_二形勢_一。乞索打拍牽挽。橫取_二錢物_一一切求利。名爲_二惡求多求_一。教_二他人求_一。都無_二慈心_一無_二孝順心_一者。犯_二輕垢罪_一。⁽²⁴⁾

第十七輕戒は、自分の利益ために権力者に近づき、様々な手段を用いて財物を得ようとしてはならないと説くものである。次の第四二問答は、「誑惑」、すなわち道理に適わぬ方法で人を惑わす者に物を与えることについての質問であり、戒の条項に対して主客が反対ではあるが、結果として不当に求める者が罪を犯すことを抑止するという法然の意図が推測される。

一つ、誑惑に物呉るるは罪にてそうろうか。

答う、罪にてそうろう。⁽²⁵⁾

第三十一輕戒「不行求贖戒」

佛言。佛子。佛滅度後於_二惡世中_一。若見_下外道一切惡人劫賊賣_二佛菩薩父母形象_一販_二賣經律_一。販_二賣比丘比丘尼_一亦賣_二發心菩薩道人_一。或爲_二官使_一。與_二一切人_一作_中奴婢_上者。而菩薩見_二是事_一已。應_下生_二慈心_一方便救護處處教化。

取_レ物贖_中佛菩薩形像。及比丘比丘尼發心菩薩一切經律。若不_レ贖者。犯_ニ輕垢罪_一⁽²⁶⁾

第三十一輕戒は、仏滅後の惡世において、外道や惡人が、仏像や修行者を売り払おうとしたのを見たならば、贖い救わなければならないと説くものである。『和語灯錄日講私記』も言及する_二に_一⁽²⁷⁾、第一〇八問答はこの戒に係する問答である。

一つ、經仏など売りそうろうは罪にてそうろうか。

答う、罪深くそうろう⁽²⁸⁾。

第三十三輕戒「邪業覺觀戒」

若佛子。以_ニ惡心_一故觀_ニ一切男女等圖。軍陣兵將劫賊等圖。亦不_レ得_レ聽_ニ吹貝鼓角琴瑟箏笛歌叫伎樂之聲_一。不_レ得_ニ樗蒲圍碁波羅賽戲彈碁六博拍毬擲石投壺八道行城爪鏡著草楊枝鉢孟髻髻。而作_ニ卜筮_一。不_レ得_レ作_ニ盜賊使命_一。一一不_レ得_レ作。若故作者。犯_ニ輕垢罪_一⁽²⁹⁾

第三十三輕戒は、修行を妨げるような「争いごと」「音楽」「賭博」「うらない」を戒めるものである。第五六問答で問われることは、この「歌叫」に該当するであろう。また、八斎戒および十戒には「不歌舞觀聽戒」が説かれており、こちらを問題とするものかもしれない。いずれにせよ、戒の問題であることには変わりはないといえよう⁽³⁰⁾。

一つ、歌詠むは罪にてそうろうか。

答う、強ちに得そうらわじ。ただし罪も得、功德にもなる⁽³¹⁾。

第三十六輕戒「不發誓戒」

若佛子。發_二十大願_一已。持_二佛禁戒_一。作_二是願言_一。寧以_二此身_一投_二熾然猛火大坑刀山_一。終不毀_二犯三世諸佛經律_一與_二一切女人_一作_中不淨行_上。

復作_二是願_一。寧以_二熱鐵羅網_一千重周匝纏_レ身。終不下_二以_二破戒之身_一受_中於信心檀越一切衣服_上。

復作_二是願_一。寧以_二此口_一吞_二熱鐵丸及大流猛火_一經_二百千劫_一。終不下_二以_二破戒之口_一食_中信心檀越百味飲食_上。

復作_二是願_一。寧以_二此身_一臥_二大猛火羅網熱鐵地上_一。終不下_二以_二破戒之身_一受_中信心檀越百種床座_上。

復作_二是願_一。寧以_二此身_一受_二三百鉞刺_一經_二一劫二劫_一。終不下_二以_二破戒之身_一受_中信心檀越百味醫藥_上。

復作_二是願_一。寧以_二此身_一投_二熱鐵鑊_一經_二百千劫_一。終不下_二以_二破戒之身_一受_中信心檀越千種房舍屋宅園林田地_上。

復作_二是願_一。寧以_二鐵錘_一打碎此身_一從_レ頭至_レ足令_レ如_二微塵_一。終不下_二以_二破戒之身_一受_中信心檀越恭敬禮拜_上。

復作_二是願_一。寧以_二百千熱鐵刀鋒_一挑_二其兩目_一。終不下_二以_二破戒之心_一視_中他好色_上。

復作_二是願_一。寧以_二百千鐵錐_一遍_レ刺耳根_一經_二一劫二劫_一。終不下_二以_二破戒之心_一聽_中好音聲_上。

復作_二是願_一。寧以_二百千刃刀_一割_二去其鼻_一。終不下_二以_二破戒之心_一貪_中嗅諸香_上。

復作_二是願_一。寧以_二百千刃刀_一割_二斷其舌_一。終不下_二以_二破戒之心_一食_中人百味淨食_上。

復作_二是願_一。寧以_二利斧_一斬_二斫其身_一。終不下_二以_二破戒之心_一貪_中著好觸_上。

復作_二是願_一。願一切衆生悉得_二成佛_一。而菩薩若不_レ發_二是願_一者。犯_二輕垢罪_一。⁽³²⁾

第三十六輕戒は十三の誓願を發さなければならぬことを説くものである。その誓願の内容は、不淨の行為をし

ない（第一）、破戒の身では布施を受けない（第二―第七）、破戒の心では色声香味触の五塵をとらない（第八―第十二）、一切衆生の成仏を願う（第十三）としてまとめることができる。受戒した者は、これらの誓願を起こしていることになるのであり、第八四問答は、この第二から第七の破戒の身で布施を受けないという誓願に関わるものであると考えられる。

一つ、信施を受くるは罪にてさうろうか。

答う、勤して喰う僧は苦しからず。せねば深し。⁽³³⁾

また、次の第八七問答も、信施として奉じられた物を食べることを問題とする意味で、第三十六輕戒に関するものであると考えられる。ただし、「僧の物喰」う者が受戒したものとは考えにくいため、その応答も第八四問答とは異なるであろう。

一つ、大仏、天王寺などの辺に居て僧の物喰いて後世取らんとしさうろう人は罪か。

答う、念仏だに申さば苦しからず。⁽³⁴⁾

第四十三輕戒「無慚受施戒」

若佛子。信心出家受_二佛正戒_一。故起心毀_二犯聖戒_一者。不_レ得_レ受_二一切檀越供養_一。亦不_レ得_二國王地上行_一。不_レ得_レ飲_二國王水_一。五千大鬼常遮_二其前_一。鬼言_二大賊_一。若入_二房舍城邑宅中_一。鬼復常掃_二其脚跡_一。一切世人罵言_二佛法中賊_一。一切衆生眼不_レ欲_レ見。犯戒之人畜生無_レ異木頭無_レ異。若毀_二正戒_一者。犯_二輕垢罪_一⁽³⁵⁾

第四十三輕戒は、出家受戒しながら故意に破戒した者が布施を受けることを戒めるものである。本論冒頭でも触

れたが、第五三問答は、持戒の生活を捨て還俗したものに對して「一切衆生、眼に見ることを欲せざらん」とする文言の解釈を問うものであると考えられる。

一つ、還俗の者に目を見合わせずと申しそうろうはまことにそうろうか。

答う、さまで説かず。僻事⁽³⁶⁾。

また、この戒では、「ことさらに心を起して聖戒を毀犯」する者を戒めるものであり、その点を問うものとして次の第五四問答を指摘できる。

一つ、還俗を心ならずしてそうらわんはいかに。

答う、浅くや。⁽³⁷⁾

第四十四輕戒「不供養經典戒」

若佛子。常應^下一心受^ニ持讀^ニ誦大乘經律^一。剝^レ皮爲^レ紙刺^レ血爲^レ墨。以^レ髓爲^レ水析^レ骨爲^レ筆書^中寫佛戒^上。木皮穀紙絹素竹帛亦應^ニ悉書持^一。常以^ニ七寶無價香花一切雜寶^一。爲^ニ箱囊^一盛^ニ經律卷^一。若不^ニ如法供養^一者。犯^ニ輕垢罪^一。⁽³⁸⁾

第四十四輕戒は、經典を如法に供養しなければならないことを説くものであるが、「如法」の具体的内容については説かれていない。このことに起因するのであらう、『一百四十五箇条問答』には經典の取り扱いについて尋ねるものが多く見られる。

第八問答

一つ、經の陀羅尼は灌頂の僧に受けそうろうべきか。

答う、『法華經』のは苦しからず。灌頂の僧の受けさする陀羅尼は別の事。それは思召しよるな。⁽³⁹⁾

第二問答

一つ、仏の名をも書き貴き事をも書いてそうろうを徒にせじとて焼きそうろうは罪の得るに、誦文をして焼くと申しそうろうはいかがそうろうべき。

答う、さる反故焼きそうらわんに何条の誦文かそうろうべき。大方は法文をば敬う事にてそうらえば、もし焼かんなどせられそうらわば淨きところにて焼かせたまうべし。⁽⁴⁰⁾

第三一問答

一つ、卷經を草子に畳む事は罪と申しそうろうはいかがそうろうべき。

答う、罪得ぬ事にてそうろう。⁽⁴¹⁾

第三二問答

一つ、仏に具する經を取放ちて人にも給ふは罪にてそうろうか。

答う、弘むるは功德にてそうろう。⁽⁴²⁾

第三三問答

一つ、一部とある經一卷づつ取放ちて読まんは罪にてそうろうか。

答う、罪にてもそうらわず。⁽⁴³⁾

第四三問答

一つ、經をして供養せずとも苦しからずそうろうか。

答う、ただ読む⁽⁴⁴⁾。

第四四問答

一つ、経千部読みては供養しそうろうべきか。

答う、さもそうろうまじ⁽⁴⁵⁾。

第四七問答

一つ、経をば僧に受けそうろうべきか。

答う、我と読みつべくば僧に受けずとも⁽⁴⁶⁾。

第八一問答

一つ、数珠、掛帯掛けずして経を受けそうろう事はいかに。

答う、苦しからず⁽⁴⁷⁾。

第一一三問答

一つ、魚鳥喰いては沃懸して経は読みそうろうべきか。

答う、沃懸して読む本体にてそうろう。せで読むは功德と罪とともにそうろう。ただし沃懸せでも読まぬよりは読むはよくそうろう⁽⁴⁸⁾。

第一一四問答

一つ、妻男一つにて経を読みそうらん事、沃懸しそうろうべきか。

答う、これも同じ事。本体は沃懸して読むべくそうろう。念仏はせでも苦しからず。経は沃懸して読みそうろうべし。毎日に読みそうろうとも⁽⁴⁹⁾。

授戒作法

さて、ここまでは、『梵網經』に説かれる十重四十八輕戒の各条文に照らしながら『一百四十五箇条問答』を見てきたのであるが、収録される問答の中には、戒の内容ではなく、授戒作法に関わると考えられる問答も指摘できる。次の第二二問答は授戒時の「和尚」「阿闍梨」の意味を問うものである。

一つ、戒受けそうろう時、和尚となりたまえ、阿闍梨となりたまえ、と申す事のそうろう、心得そうらわず。何という事にてそうろうぞ。

答う、和尚と申しそうろうは戒受くる時に法門習いたる師を申しそうろうなり。阿闍梨と申しそうろうは正しく戒を授くる師にてそうろうなり。これをば羯磨阿闍梨と申しそうろうなり。⁽⁵¹⁾

第二八問答は、授戒儀式において「たもつ」と応えることへの不安を問うものである。円頓戒はその性格として「一得永不失」がいわれるが、法然の応答もこれに則するものであるといえる。

一つ、女房の聴聞しそうろうに戒を持たせそうろうを、破りそうらわんずればとて、持つとも申しそうらわぬはいかがそうろうべき。ただ聴聞の庭にては一時も持つと申しそうろうがめでたき事と申しそうろうはまことにてそうろうか。

答う、これは苦しくそうらわず。たとい後に破れども、その時持たんと思う心にて持つと申すは善き事にてそうろう。⁽⁵²⁾

第四五問答は、授戒時における懺悔を意味するとは断定できないが、可能性として指摘しておく。

一つ、懺悔の事、幡や花鬘など飾りそろそろすべきか。

答う、さらでも。ただ一心ぞ大切にそろろう。⁽⁵³⁾

おわりに

以上、『一百四十五箇条問答』を円頓戒との関連性という観点から見ていくならば、百四十五箇条のうち三一の問答、すなわち約二割の問答が戒および授戒に関する問答であると見ることが出来る。戒に関わる質問に対する法然の対応についても、これまでの『一百四十五箇条問答』研究が論じる通り、念仏往生を基幹とした上での寛容な態度であるということは言うまでもない。⁽⁵⁴⁾しかし、今回新たに円頓戒を問答の背景の一つとして見るにより次のことが指摘できる。

まずは当然ながら、質問者には円頓戒を受戒した者がいたということ。そして当時、受戒した人々にとって授戒儀式は単なる現世利益を目的とした呪術的な儀式というのみではなく、授戒者にとって円頓戒の条目は順守しなければならぬ、生活を規定する要素の一つであったということ。すなわち、当時の人々のいわゆるタブーを構成する要素の一つに円頓戒が含まれていたということが推測できるのである。そしてその円頓戒に関わる疑問を法然に問いかけているということから、法然が質問者である高貴な女性たちにとって戒師として認識されていたということが考えられるのである。

また、単に戒師として認識されていたのみではなく、当時の信仰生活全般に関わる相談者として認識されていたとも考えられる。例えば、次の第九六問答は、

一つ、千手、薬師は物忌ませたまうと申す、いかに。

答う、さることなし。⁵⁵⁾

というものである。これは一見、千手観音、薬師如来に関する問答、仏事に関する問答のようであるが、しかし、これに法然の浄土教が抛り所とする阿弥陀仏を合わせると、熊野三山における本地仏とされる仏・菩薩となる。⁵⁶⁾つまりこれは熊野信仰に関わる質問なのである。そして、こうした「忌み」に関する問いに対しては、第三六問答、第七九問答、第一二五問答⁵⁷⁾における法然の応答に見られるような、一貫した「仏教に忌という事なし」と断言する、あくまでも仏教の立場からの回答を示すのである。つまり、法然は仏教や神信仰などが混然とした当時の禁忌に対して、確固たる仏教、就中浄土教の立場を明示していることが見て取れるのである。

『一百四十五箇条問答』は、当時の一定の身分階層における混然とした信仰生活の具体的状況を知る上でも、またそれに対する法然の姿勢を知る上でも極めて興味深い資料であるということが言える。

註

(1) 二〇一六年九月一六日の浄土宗総合学術大会における川内教彰氏の発表「『一百四十五箇条問答』の「つみ」をめぐって」は、特に当時の女性のライフスタイルの上にこの問答を解釈するものであり、本論文を作成する上でも示唆に富むものであった。

(2) 『浄全』九卷、七九二下。

(3) 伊藤唯真氏の「法然浄土教と民族宗教―『一百四十五箇条問答』中心として―」（『法然浄土教の総合的研究』〈山喜房、一九八四年〉）は、この問答の背景を考察するものであるが、すべてを網羅してはいない。

- (4) 『法伝全』一四八。『浄土宗聖典』第六卷、三五八。
- (5) 『大正蔵』二四卷、一〇〇四中。以下、戒の解釈については、石田瑞麿著『仏典講座14 梵網経』（大蔵出版、一九七一年）および谷玄昭監修、勝野隆広訳編『傍訳 梵網経』（四季社、二〇〇八年）を参照した。
- (6) 『昭法全』六六一。『浄土宗聖典』第四卷、四六六。
- (7) 『大正蔵』二四卷、一〇〇四下〜一〇〇五上。
- (8) 『昭法全』六六七。『浄土宗聖典』第四卷、四七三〜四七四。
- (9) 『大正蔵』二四卷、一〇〇五上〜中。
- (10) 『昭法全』六四九。『浄土宗聖典』第四卷、四五一。
- (11) 梯實圓氏『法然教学の研究』（永田文昌堂、一九八六年）第五章「法然聖人の神祇観と習俗・俗信の問題―「一百四十五箇条問答」をめぐって―」は『末法灯明記』を指摘している。
- (12) 『昭法全』六六七。『浄土宗聖典』第四卷、四七四。
- (13) 『大正蔵』二四卷、一〇〇五中。
- (14) 『昭法全』六五六。『浄土宗聖典』第四卷、四六〇。
- (15) 『大正蔵』二四卷、一〇〇五中。
- (16) 『昭法全』六五六。『浄土宗聖典』第四卷、四六〇。
- (17) 『大正蔵』二四卷、一〇〇五中。
- (18) 『昭法全』六五〇。『浄土宗聖典』第四卷、四五三。
- (19) 『大正蔵』二四卷、一〇〇五中〜下。

- (20) 『昭法全』 六五五。『浄土宗聖典』 第四卷、四五九。
- (21) 『昭法全』 六六〇。『浄土宗聖典』 第四卷、四六五。
- (22) 『大正蔵』 二四卷、一〇〇五下～一〇〇六上。
- (23) 『昭法全』 六六二。『浄土宗聖典』 第四卷、四六八。
- (24) 『大正蔵』 二四卷、一〇〇六上。
- (25) 『昭法全』 六五四。『浄土宗聖典』 第四卷、四五八。
- (26) 『大正蔵』 二四卷、一〇〇七中。
- (27) 『浄全』 九卷、八〇七。
- (28) 『昭法全』 六六二。『浄土宗聖典』 第四卷、四六八。
- (29) 『大正蔵』 二四卷、一〇〇七中。
- (30) 坂上雅翁氏は、この問答が珍海の『菩提心集』をベースにするものであると論じている。「法然上人語録の研究
(一) —「一百四十五箇条問答」を中心として—」(『長谷川仏教文化研究所研究年報』第十五号、一九八八年)。
- (31) 『昭法全』 六五六。『浄土宗聖典』 第四卷、四六〇。
- (32) 『大正蔵』 二四卷、一〇〇七下～一〇〇八上。
- (33) 『昭法全』 六五九。『浄土宗聖典』 第四卷、四六四。
- (34) 『昭法全』 六六〇。『浄土宗聖典』 第四卷、四六五。
- (35) 『大正蔵』 二四卷、一〇〇九上。
- (36) 『昭法全』 六五六。『浄土宗聖典』 第四卷、四六〇。

(37) 同右

(38) 『大正藏』二四卷、一〇〇九上。

(39) 『昭法全』六四九。『浄土宗聖典』第四卷、四五―。

(40) 『昭法全』六五一。『浄土宗聖典』第四卷、四五四。

(41) 『昭法全』六五三。『浄土宗聖典』第四卷、四五七。

(42) 同右

(43) 同右

(44) 『昭法全』六五四―六五五。『浄土宗聖典』第四卷、四五八。

(45) 『昭法全』六五五。『浄土宗聖典』第四卷、四五九。

(46) 同右

(47) 『昭法全』六五九。『浄土宗聖典』第四卷、四六四。

(48) 『昭法全』六六三。『浄土宗聖典』第四卷、四六八。

(49) 『昭法全』六六三。『浄土宗聖典』第四卷、四六八―四六九。

(50) 眞柄和人氏は「和尚となりたまへ阿闍梨となりたまへ」(廣川堯敏教授古稀記念記念論文集『浄土教と佛教』へ山喜房、二〇一四年)において、この表現を菩薩戒の「請師の文」として、複数ある『授菩薩戒儀』との関係性について考察している。

(51) 『昭法全』六五一。『浄土宗聖典』第四卷、四五四―四五六。

(52) 『昭法全』六五三。『浄土宗聖典』第四卷、四五六―四五七。

『一百四十五箇条問答』と円頓戒について

(53) 『昭法全』六五五。『浄土宗聖典』第四卷、四五九。

(54) 伊藤真徹氏「平安時代の浄土教信仰と法然上人―特に「一百四十五箇条問答」について」(佛敎大学法然上人研究会編『法然上人研究』(隆文館、一九七五年)、伊藤唯真氏前掲論文、梯實圓氏前掲書など。

(55) 『昭法全』六六一。『浄土宗聖典』第四卷、四六六。

(56) 篠原四郎『熊野大社』(改訂新版)(学生社、二〇〇一年)参照。

(57) 第三六問答

一つ、七歳の子、死にて忌なしと申しそうろうはいかに。

答う、仏教に忌という事なし。世俗に申したらんように。(『昭法全』六五四。『浄土宗聖典』第四卷、四五八。)

第七九問答

一つ、子生みて仏神へ詣る事、百日憚りと申しそうろうはまことにてそうろうか。

答う、それも仏法に忌まず。(『昭法全』六五九。『浄土宗聖典』第四卷、四六三〜四六四。)

第一二五問答

一つ、産の忌幾日にてそうろうぞ。また忌も幾日にてそうろうぞ。

答う、仏教には忌という事そうらわず。世間には産は七日、また三十日と申すげにそうろう。忌も五十日と申す。御心にそうろう。(『昭法全』六六五。『浄土宗聖典』第四卷、四七〇。)

※本論文は、二〇一六年一月二五日の佛敎大学法然仏敎学センター全体会において発表したものを原稿化したものである。参加された先生方には多くのご指導を頂いた。特に川内敎彰先生と齊藤隆信先生には具体的な指導を頂き、本論文に反映させていただいた。ここに謝意を表する。